

図書館視察報告

A report of European Libraries

仲 芳 樹

Yoshiki Naka

1977年8月、イギリスを主にフランス、イタリアの図書館を視察したのでその概要をまとめて報告する。

A. イギリスの現状

1. BLの組織について

現状を述べる前にその歴史的経過に触れなければならない。596年カンタベリ寺院に文庫が創設されて以来、ルネッサンス期にはオックスフォード、ケンブリッジ等の大学に図書館が作られている。中でもオックスフォード大学のボードレアン図書館は1602年の建設で世界的に知られているものである。また大英博物館図書館は1753年に設立されている。先進国の中でもイギリスは絶対主義的専制体制を離れて資本主義的近代国家建設に先鞭をつけたのであるが、1850年、公共図書館法を制定し、設置運営してきた。1919年、それが改定され、更に1964年に再改定されている。この改定は図書館サービスが相互に独立したコントロールに任せられてきた結果、サービスの格差や重複、あるいは欠如等の問題が表面化すると共に科学技術開発による急激な社会的変革の波に押されてなされたものであろう。そこには図書館サービスが義務化され、政府の監督枢が認められ、又教育科学相の諮問機関である図書館審議会も規定されている。1969年国会に提出されたデントン報告書は1973年遂に現在のBL組織を成立させたのである。デントン報告書というのは1969年教育科学相によって国会に提出された国立図書館審議委員会の報告書を指すのであるが、この報告書を作成した委員会の委員長であったF. S. Daintonの名前をとったものである。この報告書は膨大な資料に基づくものであるが、これはBML^①国立中央図書館、国立科学技術貸出図書館、英国全国書誌の四機関を統合し、The British Libraryという名称の国立中央図書館を作り、全国情報システムの実現を目指すための重要な資料となったものである。このような組織が成立するためには戦後科

BL……………The British Library

注……………図書館審議会は1966年に設置されている。

BML……………British Museum Library

図書館視察報告

学的計画理論の推進により、経済だけでなく、社会開発や教育改革にも長期的総合計画が建てられる過程において図書館サービスにも変貌をきたさざるを得なかったという背景要因が累積されていたのである。即ち文献量の伸び、そしてその利用要求の拡大、それは高等教育の拡充による学生・研究者の急増、尚教育の大衆化現象・マスコミ発達による関心度の拡大等が図書館に対する要求の広範囲且つ高度なものに変えてしまったことにある。かくして中央政府は図書館サービスのコーディネーターとして登場し、地域間の図書館サービスの格差を是正するため、或いは重複サービスの無駄を省くため国全体としてのサービスを見直し、基準の設定あるいは総合の実施によって図書館サービスの計画化を図ろうとする意図によるものである。英国においてこのような組織を成立させるためには尚地方自治法の改定事情にも触れなければならないが、ここでは1933年の自治法が1972年に改定されていることを記するにとどめておき、図表によってBL組織の説明を加えることにする。

- A. Central Administrationとは中央管理部のことである。
- B. Research and Development Department は旧組織によるOSTI^(注1) (科学技術情報局)にあたるもので研究開発部である。
- C. Bibliographie Service Divisionは旧組織によるBNB^(注2) (全英書誌)にあたるもので書誌サービス部である。
- D. Reference Divisionは旧組織によるBMLにNRLSI^(注3) (国立科学発明参考図書館)を合せたもので四つの部署に分れているが、そのうちScience Reference LibraryはBMLの建物から離れてHolpurnとBayswaterにBranchを持っている。
- E. Lending DivisionはNCL^(注1) (国立中央図書館)とNLLST^(注2) (国立科学技術図書館)の旧組織を含めたもので現在はイングランド中央のBoston Spaにある。

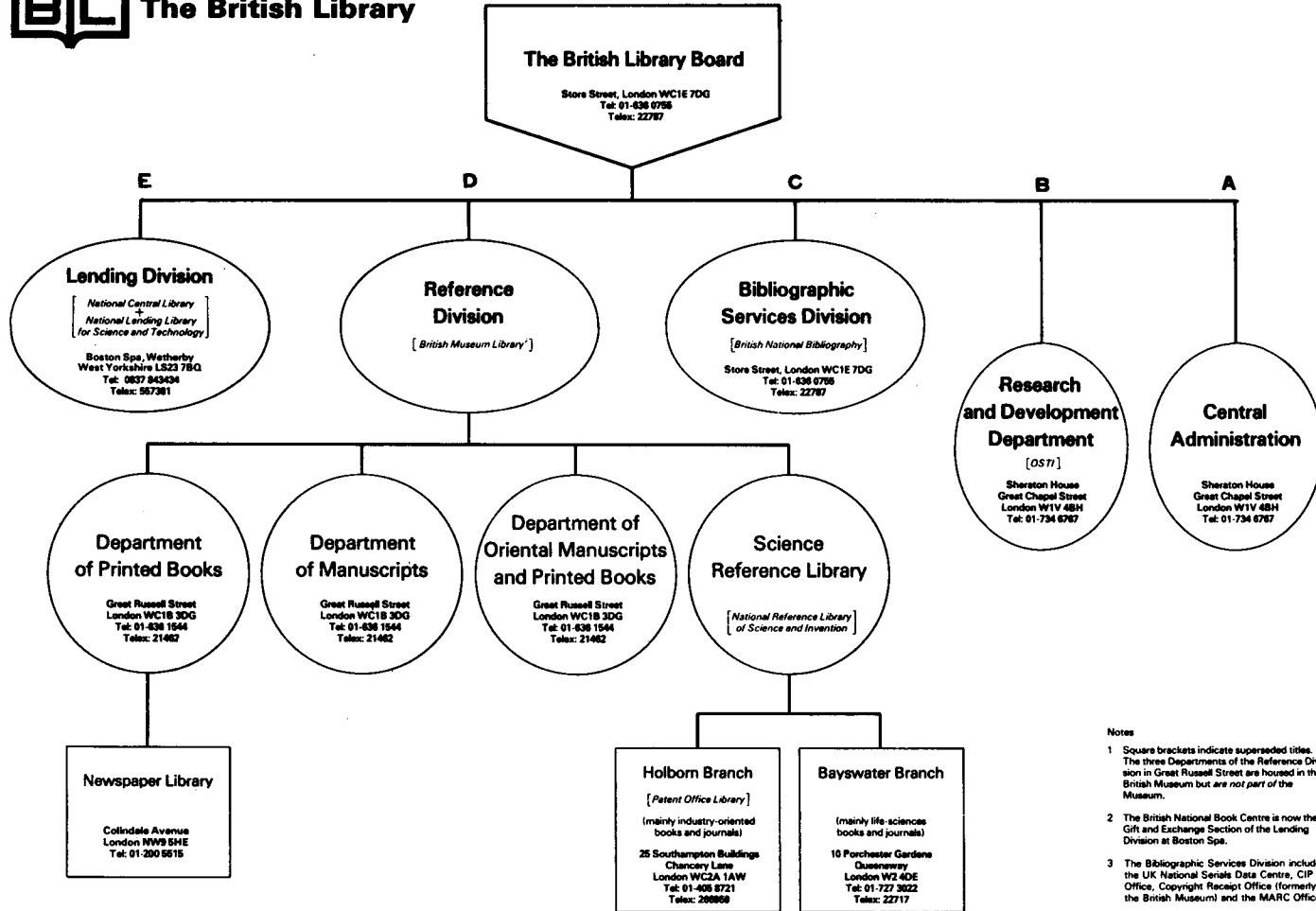
注1 OSTI.....Office of Science and Technology Information

B N B.....British National Bibliography Ltd.

NRLSI.....National Reference Library of Science and Invention

注1 N C L.....National Central Library

2 NLLST.....National Lending Library for Science and Technology



圖書館觀察報告

— (39) —

Notes

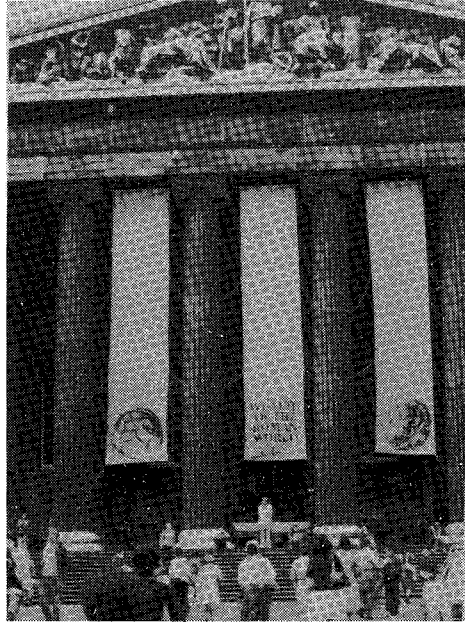
- 1 Square brackets indicate superseded titles. The three Departments of the Reference Division in Great Russell Street are housed in the British Museum but are not part of the Museum.
- 2 The British National Book Centre is now the Gift and Exchange Section of the Lending Division at Boston Spa.
- 3 The Bibliographic Services Division includes the UK National Senate Data Centre, CIP Office, Copyright Receipt Office (formerly of the British Museum) and the MARC Office

Copies of this chart may be obtained from:
Press Officer, The British Library, Store Street, London WC1E 7DG

2. BMLについて



写1 BMLの表札

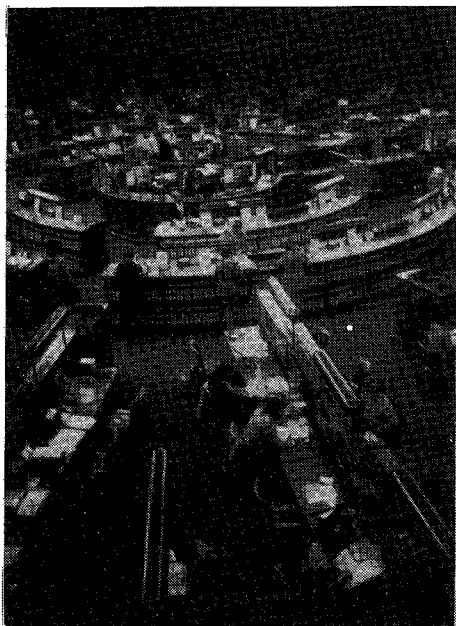


写2 BMLの玄関

B L組織の最大の部署である Reference Divisionは旧BMLの建物の中にあるが、このBMLの建物は前述の通り1753年に建造されている。ギリシヤ神殿風の大理石の柱のならば玄関、そしてホール、ドーム型の大閲覧室、書庫、その他大小の部屋がある。この建物の設計はイタリー人A. Panizziに依るもので、高さ32m、書架の前からの直径42m、床面積12,150㎡、座席数385席の円形大閲覧室が中心をなしていて、その壁面を埋めつくした参考図書に囲まれて静かに読書する研究者の光景には圧倒されるものがある。そしてその外壁に700万冊を抱えた書庫がある。アジア関係、地図、楽譜、切手を徐いたすべての言語の図書のコレクションである。書庫の天井はガラス張りである。それは光線を採るためであった。電気燈明以前、霧の多いロンドンでは暗くて検索不能になった時休館されることが多かったということである。最近では年間50万冊以上増加しつつあり収容不可能であるので5マイル離れた所に書庫の別棟ができています。

一般目録は著者名目録、西欧語出版物で、1970年以降のものについては電算機で著者及び件名目録が作成されている。この目録はマイクロフィルムで利用できる。利用者は利用票を出しておくくと利用したい本が座席まで配布される。この閲覧室の本は他の場所へ帯出できないことになっている。大閲覧室の他に次のものがある。

- a. North Library 貴重図書の閲覧120席
- b. タイプ室



写3 大閲覧室



写4 書庫の天井

c. North Library ギャラリー 未整本、定期刊行物 マイクロフィルム 大型本の閲覧

d. Map Library 地図の閲覧

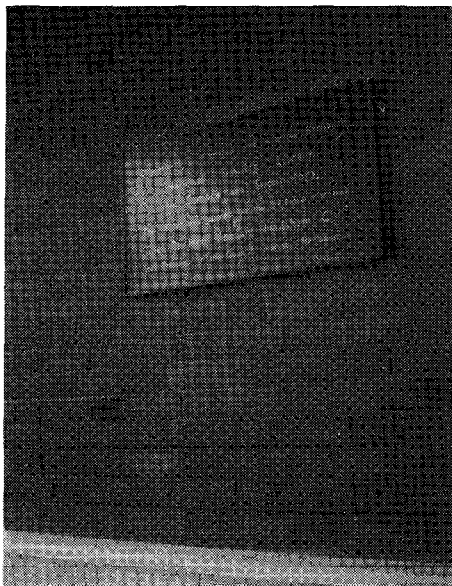
e. Official Publication Library 政府刊行物

f. Library Association. 図書館、情報関係の定期刊行物、モノグラフの閲覧

尚このBMLでは複写サービスも行っている。

イギリスには三つの国立図書館がある。即ちこのBMLとNational Library of ScotlandとNational Library of Walesである。法律によってイギリスで出版されるすべての出版物を受け入れる図書館である。この他にオックスフォード大学のボードレアン図書館とケンブリッジ大学の図書館、それにダブリンのトリニティカレッジの図書館も納本図書館とされているが、オックスフォードとケンブリッジ、それにBMLが事実上三大図書館といわれているものである。イギリスで出版される図書は1972年に改正された法律によってこれらの図書館に納本しなければならないことになっている。BMLの任務は自国の出版物の完全収集と保存にあるが、尚如何なる利用希望者にも公開されなければならないことになっている。しかし実際には限られた人にしか利用されていない。利用できるのは他の図書館にないということが証明されている証明書持参の大学院以上の学生、学者、研究者に限られているということである。そこに直面する課題があるといえよう。1980年代には新しく建設することを計画中であるということである。

3. BLLD^②について



世界最大の貸出図書館で資料の貸出しと複写サービスを行っている。国際的相互貸借のイギリスにおけるセンターである。Boston Spa に所在するのはイギリス中どこへでも24時間以内に資料を配送することができるように配慮されたものである。貸出しのために用意された資料は古いものだけでなく、新しく刊行され受け入れられるものも含めている。次のようなストックがある。

BLLDの表札

- a. 図書、定期刊行物約250万冊
- b. マイクロ化された資料約150種
- c. 計画的に新しく収集しているもの
 - イ. 重要な遂刊 47,500種
 - ロ. 重要な英語のモノグラフ年間47,500冊
 - ハ. 他言語のモノグラフ、特にロシア語の科学文献10万冊以上
 - ニ. 外国のレポート、90ヶ国以上から収集約150件以上、主としてマイクロフィッシュによる。
 - ホ. 各種主題領域の会議議事録65,000件
 - ヘ. 1962年以降のイギリスの全刊行物。1952年以降のユネスコの全刊行物。1960年以降のOECDの刊行物。1973年以降のEECの刊行物
 - ト. 印刷された音楽資料のすべてのもの、

BLLDへの依頼は年間250万件で、うち15%は外国からのものである。貸出しは個人には行わないが一般の人も Boston Spa のこの Division に行けば資料閲覧ができることになっている。複写サービスは海外にも行っている。複写料の支払いは BLLD のクーポンによって行われる。テレックスサービスも受けられる。BLLDの年間の必要経費は500万ポンドで、そのう

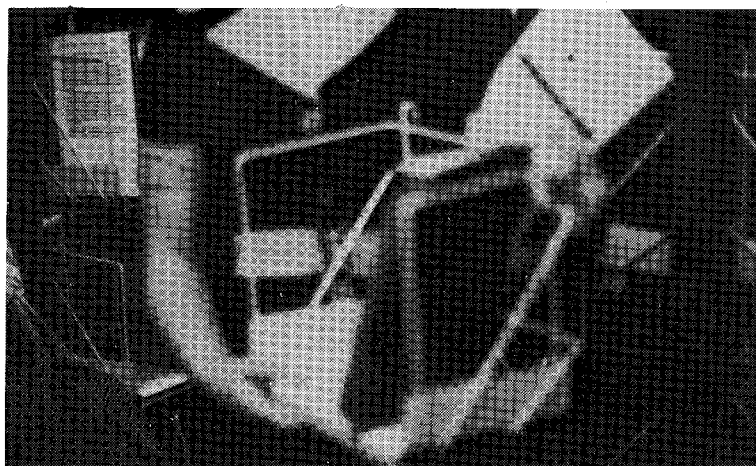
注 BLLD……………British Library Lending Division (貸出部)

図書館視察報告

ち200万ポンドは収入に依るが300万ポンドは政府負担となっている。従業員は700人、基礎資格は大学卒業程度となっているが修士課程修了の司書が望まれている。尚現在各部署のディレクターに相当する人は大学関係、出版関係、官庁関係のベテランより配置されている。

イギリスにおける図書館協力体制は全国を10地区（スコットランドを加えると11地区）に分け地区協力組織（Regional Library System）を作っている。この組織によって各地区毎に相互貸借を行ない、総合目録を保持し、資料の保存分担を行っている。地区組織には公共図書館、大学、専門図書館も加入している。そしてその運営は各館長と理事者よりなる地区理事会がこれにあたり、相互協力の業務を処理するためにその地区の大きな市立図書館等に事務局を置いている。各地区協力組織を全国的な規模でまとめるために国立中央図書館(National Centoral Libravy)があったが、現在ではBLLDに吸収されてその業務を担当しているのである。図書を借りようとする図書館は申込書を地区事務局に送る。事務局は総合目録により所蔵館をしらべそこに申込書を送ると直接申込館に資料はとどけられることになっている。その地区に申込資料のない時はこのBLLDに申込書が送られてくる。BLLDでは全国の総合目録により所蔵館を調べ、又用意してある資料を地区事務局を通じて申込み館にとどける。BLLD、地区事務局、主要図書館の間にはテレックス連絡がなされている。この組織は図書館サービスの地域閉鎖性を破るのに重要な意義を持っているといえよう。

BLLDでは婦人従業員の増加につれ書庫の中の書架には写真のような引き出し式のものが用いられていた。それは重量の限度を示すものであろう。



引き出し式の書架

4. Bibliographic Service Division (書誌サービス部)

B Lへの資料の受け入れ、その目録の作成及び電算機処理を含めた各種の書誌的サービス

図書館視察報告

を行っている。即ち全英の出版物に関する最新の書誌的ツールの作成と出版、更に図書館、出版社、書店に対する書誌的情報の蓄積処理及び配布に関する電算システムの開発等に力を注いでいる部署である。刊行されている書誌的ツールに次のものがある。

- イ. British National Bibliography (BNB)
- ロ. British Catalogue of Music (BCM)
- ハ. British Education Index (BEI)
- ニ. Books in English (Microfiche) (BIE)
- ホ. British union Catalogue of Periodicals
- ヘ. BNB MARC Tape Service

BMLで刊行していたGeneral Catalogue of Printed BooksはGeneral Catalogueに関連する出版物 件名索引と共にこのDivisionがReference Divisionと協力し、最新の電算機技術を駆使して作成している。またInternational Serials Data Centre (パリ在)と緊密な連携を保ちつつ、情報流通の効率化をはかるためにISSN^①を採用しこのDivisionと不可分の関係にあるUK National Serials Data CentreがISDS^②へ逐次刊行物の書誌的データを送っている。書誌的サービスの中に、CIP^①カードがある。新しく出版される図書について分類、件名標目を含む書誌的データを図書館および出版業界に提供するものである。このデータはUK MARC^②テープ、British National Bibliographyおよび図書にも示される。図書館がこのカードを使用することによって目録作業費の節約、整理期限の短縮がはかれる。このサービスは1957年1月1日以降の英国出版物について、BNBに記載された事項と同じものがカードで利用できることになっている。

尚このDivisionの一角に日本文献4万冊が収納された書庫がある。未整理につきCatalogueは未刊である。

5. ASLibについて

ASLib^①はBL組織外のものであるが、常にBLとの深い関係を保ちながら活動している機関である。1924年に創立され、情報の収集、検索および配布に関する問題を専門的に扱う調査機関である。会員（個人会員及び産業界、研究機関、地方自治体、大学、技術研究機関、

注1 ISSN……………国際標準逐次刊行物番号

2 ISDS……………国際逐次刊行物データシステム

注1 C I P……………Cataloging in Publication

2 UK MARC……………機械可読目録

注1 ASLib……………The Association of Special Libraries and Information Bureaux (科学技術系専門図書館協会)

図書館視察報告

官庁などの団体会員)に主題に関する情報サービスおよび情報処理に関する助言、研修を行っている。

次のような諸活動がみられる。

a. 情報サービス

会員から要求があったときどのような主題に関しても情報を提供する。要求回数には制限がない。その費用は年会費に含まれているので会員は無料である。

イ. 技術情報サービス

ロ. 市場関係の情報サービス

ハ. 書誌的情報サービス

ニ. 翻訳情報サービス

1951年より開始され。すべての言語を対象の翻訳者を登録して行っている。現在索引されているもの約25万件、年に1万2千件ずつ追加されている現状である。

b. 研 修

年40コース開催 年800名の受講者あり。会員は受講料が割引かれることになっている。

イ. 入門コース

図書館、情報サービス機関への新入者および若干の経験を経たものを対象としている。

ロ. 新処理技術教育コース

ハ. 特種資料取扱コース

c. 助 言

イ. 新図書館および新情報サービスの計画化

ロ. 現業サービスの見直し

ハ. 機械化を含むシステムの設計

ニ. 図書館に利用できる商業ベースの機器システムの選定

d. 其 の 他

イ. 刊行物の発行

Aslib Information (月刊)

Aslib Proceedings (月刊)

Journal of Documentation (季刊)

Aslib Booklist (月刊)

Program;news of computer in Eng (季刊)

Index to theses (年刊)

其 の 他

ロ. 専門家の登録

ハ. 会議の開催

ニ. ASLID informationによる情報関係のニュースの流布

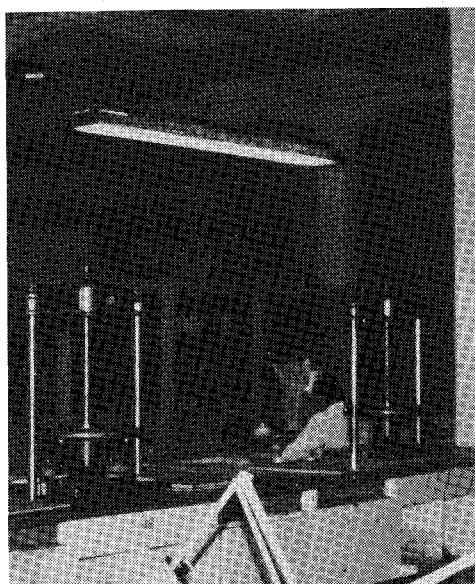
ホ. グループおよびブランチの活動

B. イタリア

Centro di Restauro (La Biblioteca Nazionale central di Firenze)

国立中央図書館は1747年に創立、1861年に国立図書館に、1885年国立中央図書館と改称された。1870年にイタリアで出版された著作物を受け入れはじめたが、納本制度は1939年に確立した。蔵書は430万冊、写本は2万4千冊、利用者は1日平均1,400名程度である。特種コレクションとしてはMagliabechiコレクション Palatino文庫、修復された古写本などがある。

1966年11月4日の豪雨でアルノ河畔にあるこの国立中央図書館は洪水の被害をうけた。蔵書のうち16世紀より19世紀のコレクションの半分以上が泥水につかり、885点の絵画、壁画彫刻が



修復センターの内部

甚大な被害を受けた。よって国際的援助により修復センターが設立され、それは現在図書館に移されている。修復センターは新しいシステムでこの仕事に取り組んでいる。修復センターの目的は人類文化の歴史的集積を破壊から守ることにある。被害を受けた資料を元の姿に修復保存するためには、修復技術者には各時代のそれに対する方法と資料について深い知識が要求されている。従ってセンターは単に修復するだけでなく、保存方法についての技術開発も行っている。

現在イタリアには国立図書館が7つあり、フィレンチェの他ローマ、ナポリ等にあるこの図書館は国内の全出版物を収集している。尚15世紀に設立されたヴァチカン図書館は貴重な文献700万冊を所蔵している。

C. フランス

Bibliothèque Nationale de Paris

国立図書館は6つある。そのうちこのパリ国立図書館は15世紀にはじまった王室図書館が1785年に公開され、1789年フランス革命後に設立、1943年に納本制度をとっている。蔵書は約600万冊、定期刊行物は国内誌1万5千種、外国誌約3,500種、資料の豊富なことはヨーロッパにおいても最大といわれる。大閲覧室は360名しか収容できないがこの閲覧室もBMLと同じく円形ドーム型



パリ国立図書館入口

図書館視察報告

である。利用者は原則として学術研究者、大学で資格を定められたものに利用させている。

a. 写本室

昔の国王図書館から引きついで写本
約1万54巻がある。

b. 版画室

約500万枚の版画、ポスター 写真

c. 貨幣室

約40万枚の貨幣

d. 地図、絵葉書室

80万枚の絵葉書 40万枚の地図

国立音楽院図書館、オペラ座図書館を付属していて、音楽関係の資料のコレクションは国際的に知られている。

又国家的、歴史的記念日などにふさわしい文献、資料を年12回展覧している。

追記 大学図書館について

図書館は大学の心臓であるといわれる。図書館活動の如何は確かに大学評価の一つの基準となり得るものであろう。整備された図書館が有効に活用されてこそ学問研究の成果は期待されるものであり、大学にとって欠くことのできぬ機関である。図書館は大学の盲腸のような存在であってはならないのである。

現代社会が要求する図書館の使命にはまことに切なるものがあるにもかかわらず、現状はその機能を十分に発揮していないものがある。日本の場合、学歴社会の温存も手伝って実質的学力低下を招いているが、そこには図書館利用度も低下の傾向がみられ、結果として図書館も無風地帯に孤立させられている感が強い。そこには因習的閉鎖性が根をはり、機能の展開を拒むことにもなっている。

もともと図書館は人類の遺した文化財の保存場所として意義を持っていたのであるが、教育という営みが社会活動としての重要な機能であると考えられるようになってきたとき、図書館は単なる保存の目的だけではなく、教育のための資料提供が使命として加ってきた。西洋においてはギリシヤの昔に、日本においても千年の昔に、その源泉を求めることができるが、図書館が社会に解放され、社会に奉仕しなければならないという意識が芽生えてきても、それがおかれていた社会的背景があまりにもながい封建的社会を経過してきているために図書館にのこされた因習は閉鎖性の強いものがある。近代社会が形成され、近代的な教育機構の中に設置された図書館にも共通的な閉鎖性は依然として尾を引いているといつてよい。

社会の流れはまことに急なるものがある。高度経済成長政策に基き、思わざる成長をとげたその背景に、経済的効率に従属した科学技術研究の推進が、それに対応する図書館の再編を迫り、この領域における活動には旧態然を許さぬものがある。電算機等の導入によって面目は一新されつつあるが、四百数十校に及ぶ国私立大学において現在電算機を導入してい

図書館視察報告

るのは僅か20数校に過ぎず、しかも図書館専用とは限らず、管理業務と情報業務に兼用されているのが半数を超えているという実状でもある。

元来日本の図書館は社会の要求は支えられ、国民の権利として生れ出た図書館ではなく、為政者、知識階級によって文明の象徴として需要され作られた歴史がある。明治期よりのこの傾向は現在ものこされているとみてよい。戦後新しい体制の下に地方自治体に作られつつある図書館もおこの傾向が感じられる。大学には設置基準によって欠くことのできない施設であっても、その経営運営はおきざりにされている感が強い。それは結果として無風地帯化し、そこに従事するものは微弱な地位におかれ、小市民的根性に追いやられ勝ちである。因習としての閉鎖性は解除されそうもない。

図書館の組織がいかに大きくなっても、あらゆる資料を一つの図書館で常備することは不可能である。そこに相互協力の組織が必要となってくる。イギリスでは法律に基き国家の指導力によって相互協力の組織づけがなされていることを先きに報告したのであるが、それは図書館の閉鎖性を排除する大きな役割を果たすと共に、急激に進展する現代社会の要求に答えるためでもある。

日本の大学図書館においても相互協力の必要性が叫ばれてからかなり久しいものがあるが、相互協力の理念は定着しながら、その実践面では、自然科学系の例を徐けばそれほど進展していない。専門化、細分化の方向と国際化、総合化の傾向を示す研究領域の拡大は一つの図書館の能力の限界を超えるものがある。殊に規模の小さい音楽大学の場合、それは殆んど私立であり、財政的基盤の弱い法人に支えられ、しかもそれは特種専門の資料と設備を必要とするこの図書館がその機能を充分に発揮するためには相互協力に待たねばならないことは必至である。

日本においても1943年12月より音楽図書館協議会がようやく発足した。会則によると我国の音楽資料を有する機関の連絡、提携のもとに相互協力活動を推進し、我国の音楽文化の発展に寄与することを目的とし、音楽図書館間の相互協力、機関誌及び逐次刊行物総合目録の刊行、音楽図書館学に関する研究及び調査、内外の関係団体との連絡協力等の事業を実行に移すことになっている。今のところ逐次刊行物所在目録等を刊行して、学生、研究者の便に供しつつある。しかし未だ会員数が伸びず、財政的基盤も弱く、所期の目的には程遠いものがある。全国の関係大学に意識の高揚を呼びかけねばなるまい。

今一つ国外よりの誘いかけによって行っている事業がある。それはRILM^⑩である。これは国際音楽学会と国際音楽図書館協会の協力のもとに1966年に開始されたもので、日本もこれに賛同し1967年国内委員会が組織され、音楽文献要旨目録の国内版が既に数巻発刊されている。

RILMはIAML^⑪に所属する一部署である。IAMLは1951年パリに設立され、国際音楽学会の協会のもとに音楽研究に多大の貢献を積み重ねつつあるが、その事業を推進するために12

注 RILM……………Répertoire international de Littérature musicales (音楽文献国際目録合同部会)

注 IAML……………International Association of Music Library (国際音楽図書館協会)

図書館視察報告

の部会をもっている。即ち放送図書館部会、公害音楽図書館部会、研究図書館部会・音楽大学音楽学校部会、レコードライブラリー部会、現代音楽情報センター、文献研究会、目録作成部会、教育養成部会、音楽資料国際目録合同部会、音楽文献国際目録合同部会、音楽図象学合同部会である。別に国際音楽集録協会というのがあるが共に協力し合って、地道な活動を続けているものである。

このように相互協力のきざしは見えつつあるが、更に図書館の機械化の方向に進みつつあるとき、そこに従事するライブラリアンの資質が問われることになる。書誌的事務や機械操作の技術もさることながら、それ以前の一般的教養の高い基準が要求されることになる。具体的には修士課程において司書資格が得られるという仕組み、これは既に先進国において実施されていることであるが、イギリスでは強く強張されていた。

更に図書館はその使命からして、それに従事するライブラリアンは奉仕の精神に徹しなければならないであろう。奉仕は英語の Service の訳語である。もともと封建社会において主従の関係において生れ出た言葉であると聞く。即ち主は従に封じ、そのために従は主に奉仕しなければならないのであったのである。それが現代では他人のため役立つよう献身的に仕えるという意味において、図書館ではあらゆる業務に奉仕の精神が必要となっているのである。

現代の大学図書館の抱えている課題、それは閉鎖性の排除、機械化の推進、相互協力体制の拡充等々、これらの解決には当然図書館職員、大学構成員の自主的協力に待つより仕方がないと思うが、時代の流れにとりのこされまいよう一刻の躊躇をも許されないことを自覚しなければならない。

後記

この報告書は訪問した各図書館より得た資料に基くものである。尚同行の東洋大学教授井出翁氏に資料提供等多大の指導をうけたことを記して謝意を述べておかねばならない。

引用参考資料

1. 各図書館より得た案内書
2. 音楽学臨時増刊 P 49
3. 音楽文献要旨目録4 RILM
4. 音楽関係遂次刊行物所在目録1976年版
5. 図書館雑誌1977年 4、5月号
6. 現代の図書館1976年12月号
7. 図書館ハンドブック
8. ブリタニカ国際百科事典14巻

